

伊藤整全集

第七卷

伊藤整全集 第七卷

昭和三十年十一月五日
昭和三十年十一月十日

第二次初版印刷
第二次初版發行

定價貳百七十三圓
地方定貳百七十五圓

著者

伊藤整

發行者

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出孝雄

印刷者

東京都文京區小石川柳町二六番地
山元正宜

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出書房

電話東京(29)三七二一番



印刷・三晃印刷 製本・小鳳製本

目次

鳴海仙吉	五
------	---

讀者に	六
-----	---

一 鳴海仙吉の朝	七
----------	---

二 出家遁世の志	二三
----------	----

三 シェイクスピア談	三九
------------	----

四 仙吉と學生	六三
---------	----

五 仙吉街を行く	七七
----------	----

六 仙吉とユリ子	八八
----------	----

七 知識階級論	一一五
---------	-----

八 不安	一二四
------	-----

九 小説の未來	一三八
---------	-----

十 送別會……………一五五

十一 藝術の運命……………一七三

十二 雪の夜語り……………一八六

十三 汚れた聖女……………二〇一

十四 幻燈……………二一六

十五 地獄……………二三〇

十六 終幕……………二四九

あとがき……………二六九

鳴海仙吉拾遺……………二七一

一 鳴海仙吉の詩……………二七二

二 鳴海講師の憂鬱……………二七三

三 對話……………二九六

ホオマア物語……………	三二五
一 シュリイマンの話……………	三二四
二 始 祖……………	三二四
三 女……………	三二九
四 神と人……………	三三〇
五 女神の愛……………	三六九
解 説……………	三七一
瀬 沼 茂 樹……………	三七一

裝
幀

岡
本
芳
雄

鳴
海
仙
吉

讀者に

鳴海仙吉とは誰か。作者自身にちがいないとあなたは思うでしよう。

とんでもないことです。鳴海仙吉は君です、あなたです。

一つ氣の利いたことを言つてやろうと思う時、君は鳴海仙吉です。

この急場を何とか切り抜けようと思う時、君は鳴海仙吉です。

心の傷に眼をつぶつて生きのびようと思う時、君は鳴海仙吉です。

鳴海仙吉は自殺もせず、革命もしませんでした。將來もしないでしょう。彼は飴色縁の眼鏡をかけ、鼠色のダブルの洋服を着、革鞆を持つて、智慧あり顔に街を歩いています。君のように、また作者のように。

一 鳴海仙吉の朝

今日は鳴海仙吉の札幌へ出かける日である。彼は朝日の射す、自分の小さな家の縁側の古椅子に腰かけて、大事そうに一本の巻煙草を喫っている。彼は外出用の、三四年前に裏がえしたフラノの服のズボンをつけ、ワイシャツを着てカラアをつけずにいる。彼はその姿のまま、この縁側のすぐ向うにある、この家と鍵の手に並んで建っている母家で朝食を済まして来たところだ。母は早くから起きて畑へ行つたらしく、見えなかつた。

彼はこの三間の、隠居家に一人で暮している。食事は母家の弟夫婦や母と一緒にしている。仙吉は妻と子供二人を連れて、去年の春東京からここへ疎開して来た。その夏、戦争が終り、冬を越すと、妻の桃子は、中學二年生の梅太郎と一年生の竹二郎とを連れて、幸いに空襲の火災から免れて残つた東京の郊外の借家へ戻つて行つた。都會生活に慣れた身體の弱い桃子は、働きのものの姑の監督を受けて、ここできりぎり働かされるのに閉口していた。それに都會育ちの妻や子供たちは東京への郷愁に憑かれていた。仙吉は、妻子を東京に送り届けてからこの家に戻り、週に二日

札幌の學校へ講義に行き、外の日には賣文の評論や隨筆を書いて暮している。

彼はさつきから新聞を待つてゐるのだが、それはまだ來ない。そのとき、彼の足もとの縁さきに弟の子供が三人現われた。七つと五つの坊主頭、それに、もつと小さい三つのおかつばである。

「伯父ちゃん、寢坊だなあ」と七つの務が、自分の言つてゐることが分つてゐるという表情を、陽に焼けた面長な顔に浮べ、仙吉の顔を批評するように眺めながら言つた。

「伯父ちゃん、寢坊なんだよ」と五つの丸顔の久が、賑やかな、騒ぎ立てたい氣質から、仙吉の坐つてゐる椅子の脚を動かそうとして握つて見ながら、兄の言葉を繰りかへした。

「うん」と言いながら、仙吉は煙草の灰を、久の丸い大きな頭にかからないように、氣をつけて落した。

「オジチャン、ワワ」と、やつとこの頃戸外を歩けるようになった三つの恵が、まわらぬ口で兄たちを眞似、目だけは一人前に利口そうに光らした。彼女はやつと首が縁側から出る程であつた。

三人とも伯父さんに相手になつてもらいたいのである。

だが、仙吉は昨夜おそくまでかかつて手を入れた十五年も昔の自分の詩のことを考へていたので、この爆發物のよう

な子供たちに應じてやらなかつた。

「伯父ちゃん」と力を入れて繰りかえしたのは、二番目の丸顔のはしやぎ屋の久であつた。いつもあんなに仲よくしたじやないか、という非難の調子であつた。

「うん」と答えるだけで、仙吉は子供等の方を見なかつた。食後の煙草を静かに吸いながら、彼はあれ等の古い詩を直して見たら、そこから今後また自分の詩を作るきつかけを産み出せるものかどうかを思案していたのである。

脊の順に並んだ子供たちは、伯父さんが何か言つてくれるかと、暫く待つていたが、それが無駄だと分ると、つまらなそうに、それぞれモンベ型ズボンの後姿を見せながら裏庭の方へ歩いて行つた。それにしても昨夜手を入れた詩はどんな風だつたか、考えすぎて調子をこわしていないか、昔のものは昔のまま直さない方がよかつたかしら、と思つて仙吉は腰をあげ、玄關の上りかまちを横切つて三疊の書齋へ入つて行つた。

そこはフロオリングを張つた板敷である。西向きの格子窓の下、古風な型の坐り机の上に、縁の黄色くなつた古ノオトが擡げてある。その前に敷いてある黒い座蒲團に坐つて、鳴海仙吉はもう一度昨夜手を入れた詩に眼を通した。

林で書いた詩

やつぱりこの事は言わずに行こう。

今のままのあなたを

淋しければ目に浮べていよう。

あなたは白樺の緑の美しい故郷で嫁に行き、
いいお母様になり、

日々の生活のなかに
夢みたいな私のことは

刺のように心から抜いて棄てるだらう。

私の言葉などは

若さの言わせた間違いに過ぎないときめてしまふだらう。

いつか、人が皆忘れた頃に私は故郷へ歸り、
閑古鳥のよく聞える

から松の林の端れに家を建てて住もう。

草藪に蔽われて見えなくなるような家を。

私は李の垣根に沿つて村道を歩き、

数々の思い出を拾ひ集め、

それを古風な更紗のようにつぎ合せて

一つの物語にしよう。

すべてが遅すぎるその時になつたら、

私はきれぎれな色あせた物語を書き、
枝を洩れて月影の射す机の上に置こう。

この詩はあちこちを書き直してあつた。一行目は「この事だけは」となつていたのを、何年とも知れぬ前に「だけ」を消してある。五行目の「いいお母様になり」というのは、全部二本の棒を引いて消してあつたのを、昨夜彼はまた生かして見たのである。それを入れた方が、一人の青年が、その愛情をうち明けるのをためらう愛人の未來の姿として描くのに適當かどうか分らなかつた。この詩にある自己放棄のロマンチックな夢にとつて、この一行は不消化な夾雜物になりそうでもあり、またその女性の姿を完全にするの役に立ちそうでもあつた。仙吉はそう思つて、また生かして見たのだが、自信はなかつた。最後の二行は、

枝を洩れて月影の射す机上に

私はきれぎれな色あせた物語を書き残そう。

となつていたのを、ふと昨夜このように直して見たのだつた。物語を書いてから、机の上に置く、という方が、もつと靜かな落ちついた印象になりそうであつた。しかし、いま朝の明るい光のなかで讀みかえすと、二十歳の青年の書

いた疊みかけるような反復の調子がそこで挫けているような氣もするのであつた。

仙吉は左手で額をおさえて机に肘を突いた。確信を持てなかつた。確信を持てない。だが、二十二三の時にこれがこの詩の中で夢想していたこの故郷へ歸つて暮すという生活に、とうとうおれは立ち到つたわけだな、と彼は思うのであつた。仙吉は、それに續いて、茂木ユリ子のことを考えた。仙吉は二十三歳の頃、友人の茂木篤の妹だつたユリ子のことを考えながら、この詩を書いたのであつた。そして、それから十五年あまり經つて仙吉が空襲下の東京から村へ逃げ戻ると、ユリ子も戦争で夫を失い、女の子を一人連れた未亡人として村に戻つて來ていた。

むかし彼は茂木篤の家で、ユリ子やその姉のマリ子と遊んだ。歌留多をとつたり、トランプをししたりした。ユリ子は、いつも自分の内側に引つ込んでゐるような、ひどく内氣な娘であつた。トランプに負けても勝つても、少し微笑し、蒼白い頬にちよつと赤味がさすだけであつた。人形をつくつたり裁縫をしたりして、家に引つ籠つていた。姉のマリ子は性格が派手で、出好きで、おしやれであつた。マリ子は十八でユリ子は十六であつた。仙吉はマリ子と戀愛遊戲めいた交渉を持つようになった。マリ子と映畫を見に行つたり、海水浴に行つたり、林檎園のすみで接吻した

りした。仙吉はじりじりして、それを本氣にしようとするのだが、マリ子は無邪氣さとコケットリイとの混つた賑やかさで、いつも仙吉をはぐらかしていた。家の中に引つ込んでゐる蒼白い無口なユリ子は、彼に無縁な世界の少女のように思われた。

茂木家へ行くと、がらんとした大きな家にユリ子と女中しかいなくつて、ユリ子が出て來ることがあつた。

「兄さんは、今朝早く出かけましたの。」

「どこですか？ 學校のテニスコートかな？」

すると、ユリ子はだまつて下駄をつつかけて、長い土間のつき當りの物置へ行く。どうしたのかと思つてみると、

だまつて戻つて來て、仙吉の前に立ち止り、ちよつと微笑してから、ゆつくりと低い聲で言うのだつた。

「あのう、ラケットは置いてあります。釣竿が見えないようですから、釣に行つたのでしょうか。」

ユリ子は小柄で、丸顔だつた。笑うときも、微笑はゆつくりとその頬に現われ、ゆつくりと消えるのだつた。唇から額にかけての丸味が、無邪氣な何か幼な兒のような印象を與えた。

それだけの會話で、仙吉は大分長いことユリ子と話をし合つたような氣がするのであつた。マリ子と半日海岸の砂の上に裸で寝ころがつたり、水のかけつこをししたりして遊

ぶよりも、まだ子供にすぎないユリ子とかわすこいう二言三言の方が、女性の眞近に居るような氣のすることがあつた。ユリ子のその眞面目な、軟かな調子に、仙吉は、妙に軽い壓迫を覺えるのであつた。それで

「あ、釣か。じやまた」と帽子に手をかけて引きかえすのだが、ユリ子はなつかば後向きになつた彼に向つて、少し首をかしげて、ていねいに膝まで手が届くような挨拶をするのであつた。その挨拶が終つてユリ子が頭を上げるまで待たずに、いつも仙吉は茂木家を出てしまつたような氣がした。

大學の最後の年の暑中休暇に村へ戻つたとき、マリ子が仙吉を林檎園へ誘つた。二人は夕方出かけた。マリ子は近いうち札幌へお嫁に行くことになつた、と彼にうちあけた。そして仙吉を泣かせ、自分も泣いた。そのとき仙吉は自分がマリ子を本當に愛していたような氣がした。だがマリ子は嫁に行つてしまつた。高等工業を卒業した茂木篤は仙臺の土木建築會社に勤めていたが、マリ子の婚禮のことで來ていた。ある日仙吉は彼に逢いに行き、ユリ子に逢つた。すると仙吉は、この無口な少女にマリ子への自分の感情が移入されたような氣がした。そして眞面目な氣持になつたとき、心がひとりでユリ子のぼんやりと白い顔に集中してゐるのであつた。しかし彼はマリ子と戀愛をしてい

たのだし、その前にもマリ子の友達の子と正子という少女と向
見ずな戀愛をしていた。そういうことをユリ子は知つてい
る。それでユリ子の子供だと思ひながら、仙吉はいつも氣
後れを感じていた。だが今度上京したらもう村へ戻れない
だろうとその頃彼は考へていたので、何ごともなくユリ子
と別れてしまふのが、淋しかつた。その淋しさから彼はこ
の詩を書き、書いてしまうと、本當に自分の愛していた少
女はユリ子だつたのだと思つて、ひどく感傷的になつた。
マリ子との輕はずみな戀愛で、本當に優しいこの少女の愛
を失つた人間として自分を考へた。ユリ子そのものより、
この淡い悲しみの甘さを彼は忘れることができなかった。
その後何年か東京にいるうちに、仙吉は、ユリ子が結婚し
て横濱へ行つてゐるということを知つた。その頃は彼も東
京で桃子と結婚してゐたが、仙吉はマリ子のことよりもよ
くユリ子のことをどういふ男の妻になつたのかなと思ひ出
すのだつた。

いまユリ子はすぐ仙吉の近所の農業會に勤めて、その倉
庫の端を仕切つて住んでいて、朝夕に顔を合せるのだ。
蒼白かつた彼女は、もつと健康そりな、陽にやけた赤ら
んだ顔になつたため、昔の夢想的な感じはないが、線のはつ
きりした若々しい容貌を保つてゐた。その小柄な丸顔の唇
から顎にかけて、幼女らしい特徴のある昔の表情が笑うと

現われた。彼女は三十過ぎとは思へないほど物ごとに丁寧
で、おどおどして、一人前の主婦になり切つていない若妻
のように、戦後のけわしい世間を怖ろしげに見てゐるのだ
つた。配給物を取りそこなつたりしては、

「私はまあ、何て馬鹿なんでしょう」と仙吉の母に言い、
言つてゐるうちに涙ぐむのだつた。髪をきちんと結つてい
るかと思つと、簡單服の上着の袖が綻びてゐる。時には鼻
のわきに煤をつけてゐる。足袋に穴があいてゐる。村の主
婦たちは哀れみと輕蔑の目で、以前金持の娘だつたユリ子
の生活力の無さを見てゐるのだつた。畑も作つてゐないか
ら野菜物に困つて、よく仙吉の母がくれてやつてゐた。亡
くなつたユリ子の夫は、會社員だということであつたが、
シナで終戦の半年程前に戦死したのであつた。ユリ子は藤
田というその亡夫の姓を名乗つてゐた。

自分の詩の對象になるような女などは、今は生きにくい
世の中なのだなあ、と鳴海仙吉はユリ子の生活を見ていて
思ふのであつた。彼は自分の詩の中にゐるユリ子は、今の
ユリ子とは別な人間であつたような氣がするのだ。今では
ユリ子は戦死者の妻であり、母親であり、生活に自信のな
い主婦であり、仙吉や母に厄介をかける隣人であつた。そ
れ等の條件が昔の彼女の姿を蔽ひ埋めて、この詩の情感を
はかない夢のようなものと思はせなくなつてゐる。仙

吉はユリ子のために、扶助料のことや、保険金のことや、食料のことなどで相談を受け、世話を焼いてやる。だが彼女のことを歌つた詩をこうして長い間しまつていて、夜遅くまで筆を加えたりしていることは口に出さない。

鳴海仙吉は、文藝評論家として、英文學や佛文學の翻譯家としてこの十五年あまり東京で生活して來たが、はじめは詩人になるつもりだつた。仙吉は中學生の頃から詩を作り、詩人以外のものにはなるまいと思つていた。大學の文科に籍があつた頃、彼は學校へはろくに出席せず、若い詩人たちと交際していた。彼は自分の詩を整理して二冊のノートブックに清書し、一冊には「雪の道」他の一冊には「李咲く村」という題をつけた。彼はその「雪の道」を二百部ほど自費で印刷して出版した。郷里から送られて來た授業料で印刷費を拂つたのだつた。その詩集は、その頃出ていた詩の雑誌で二三の賞讃的な批評を受けた。ある先輩の詩人が、仙吉は新しい詩壇の希望であるという手紙を呉れたりした。彼はそれで、もう詩人として一人前になつた氣持で、頼まれるままに四篇か五篇の詩を残つたノートの中から寫して雑誌に發表し、大學の授業料は拂わなかつた。そして一年ほど經つて見ると、彼は、詩の稿料では生活できず、學校を除名になつている自分を見出したのだつた。

腹を立てた父は、絶縁同様にして送金してくれなかつた。彼は翻譯をし、文藝批評を書き、新しい詩論を主張する原稿など書いて原稿料を稼ぎはじめた。すると詩の泉が涸れてしまつたように、彼は一篇の詩も書けなくなつた。彼の評論や研究が批評で悪口を言われるのは、彼は比較的水平氣だつた。こんなものは賣文だ、何とも言うがよい。彼は原稿で生活する爲には、外國の新しい文藝思潮を紹介しなければならなかつた。彼は十九世紀から二十世紀にかけてのサンボリスムの詩論を否定し、ヴェルレーヌやエーツやメテリリンクなどの詩は過去のものだと言つた。そしてその頃第一次世界戦争後の歐洲のヒステリックな若い詩人の唱え出したダダイスムや、超現實主義の詩論を紹介した。ジャン・コクトオやガートルウド・スタインやエズラ・パウンドやブレエズ・サンドラウスなどの實驗的な詩の、翻譯できないような言葉の綾を、ことさら翻譯したりして、先輩の詩人を苛立たせ、傳統的な日本の文藝思潮に挑戦した。そういうことをしなければ、先輩のひしめき合つている文壇へ、彼のようなものが割り込む權利は無い、と彼は思つたのであつた。そうすると彼は方々からの非難攻撃の的になつたが非難されればされるほど彼は新しい詩の理論の代表者と目されるようになった。

しかし彼自身は二十歳前後に耽讀したイエーツやヴェル

レヌの詩の影響を受けていて、自分の理論では否定した過去のスタイルでしか詩を書いていなかった。それで彼は、一層自分の昔の詩を發表することができない羽目に自分を追い込んだのだつた。彼はしかも自分の評論をひそかに、賣文だ、身すぎ世すぎだと思つていたのだつた。フランスやイギリスの第一次世界戦後の絶望的な若い詩人たちの韻律の摸索や言葉の實驗を彼は信用していなかった。そして絶えず内心では眞想的なイェーツを美しいと思ひ、傷ついた小鳥のようなヴェルレヌを、そしてもつと古いラマルチヌを信仰し、上田敏と島崎藤村と北原白秋を愛讀した。そして、それ等の影響を受けたと思つてゐる自分の詩にひそかに確信を抱いてゐた。

鳴海仙吉の評論集や譯詩集や隨筆集などが次々と本になつて行つた。彼はそれによつて文學者としてどうにか生活できるようになつた。しかし彼がその評論において否定し排斥した古風な精神とスタイルで書かれた彼自身の詩、そして自らその價値を信じてゐる詩は世に出る機會を失つてしまつた。そのことを彼は、世間を見くびつた自分のやり方の當然の酬いだ、と一種の自嘲でもつて承認した。しかし一方では、見ろ、出たらめな評論が大手を振つて歩き、眞實の美しい詩が埋もれてしまふ、とそれだけ一層世間を見くびつた。仙吉は時々その古い詩のノートと今では一冊

しか残つていない假綴の貧相な詩集「雪の道」を本箱の奥から取り出して讀み、ひそかにそれ等の詩に確信を持つた。そしてちよつと筆を加えてはまたしまひ込むのをひそかな楽しみにしてゐた。

仙吉が三十歳になつた頃、日本は滿洲で戰爭を始め、それがシナ全土にひろがつて行つた。それに續いて歐洲でヒットラアがポオランドやノルウエイやフランスに侵入した。日本はそれに呼應して太平洋でイギリスとアメリカを相手に戰爭を始めた。歐米の色彩を帶びた思想は日本では悉く異端とされるようになった。英佛の文學を種本にしてゐた鳴海仙吉は仕事がしにくくなつた。鳴海仙吉は英米派で自由主義者だ、と言つて槍玉にあげられることが何度かあつたが、彼は知らぬふりをして過ごした。彼は抒情詩人的な臆病さから、マルクシズムに自分を登録したことが無かつたので、投獄と中世の宗教裁判のような轉向宣誓の強要は免れた。だが仙吉は立場の不安を感じて國粹主義者の知人に個人的に接近し、詩人の任務は國家の隆興に寄與するところにあるという趣旨の愛國詩人論を書いたりした。そして彼は英米派として罵られるのを怖れ、召集を怖れ、空襲を怖れ、戦々兢兢として數年を過ごした。

その太平洋戰爭が終つて見ると、彼は父親の殘した五町歩の畑の地主として郷里の母の隱居家に住んでおり、超現

實主義も愛國詩人論も雲散霧消したような安心を覚え、あの古い一冊の詩集と詩のノットとを、それ等を昔書いた青年時代の自分の机の上に擴げて夜遅くまで坐っているのがあつた。彼は四十歳になつた。

机の上のインキ壺のそばにおいてある腕時計が八時を指していた。彼は八時四十分の汽車に乘らねばならないのだ。仙吉は五分の一ほど残つた巻煙草を崩さないように灰皿の縁で消し、それを煙草の箱の中へ叮嚀にしまひ込んだ。煙草の配給は少いし、闇値で買りと公定價格の十倍ほど金を拂わなければならなかつた。巻煙草の喫いがらは、あとで日本傳統の細い煙管にはめると無駄なく喫えるのだつた。仙吉はノットブックを閉じ、引出しにしまつて立ち上つた。窓の横の釘にかけてあるソフトカラアと太絲ホオムスパンの褐色のネクタイとを取つて、柱がけの錆びた鏡の前でそれをつけた。

彼は去年の秋眼鏡をこわした時、それまで使つていたような黒いセルロイド縁が札幌の眼鏡屋に無くて、しやれた形の鉛色縁のを作らせたが、それが少し氣障つぽいような氣がして、ネクタイを結ぶ度に自分の顔を見直すのであつた。今もその鏡の中に仙吉は、平べつたく、色艶の悪い、眼の窪んだ、癖の強い髪が寝起きのまま逆立つている自分の顔を見るのであつた。鉛色の眼鏡は、少し派手で自分の

顔に似合わないような氣がした。

どうもこいつは、と思ひながら仙吉はチョッキとダブルの上着とを着、その胸のポケットから小形の櫛を取り出して髪を撫でつけた。そして、もう一度鏡をのぞいた。昔その同じ鏡に寫つていた鳴海仙吉とどこが違ひのだらう。昔はもつと氣障な縁なし眼鏡をかけていても、何となく似合つていたものだつた。頬はもつと艶があつて赤かつたし、眼も窪んでいなかったが、おれは同じ鳴海仙吉ではないのか。母親が懸命に畑を作つていてくれるので、自分は戦後の日本人の大部分がかかつている榮養失調にもなつていない。魚だつて漁業會に勤めている弟の仕事の關係で、毎日のように食べている。東京にいた頃こけていた頬は大分直つて來た。

それなのに一體この顔はなんだろう。仙吉はその暗赤色の眼鏡の似合わない自分の顔を今度は他人のような氣持でじろじろと眺めた。

その鏡に寫つているのは、もう人生に驚きを期待しなくなつた、一種の精神疲勞感を持つた、もの分りのよさそうな、洋服をきちんと着た、少し神經質な中年の紳士の顔であつた。その顔は、何か仙吉の氣持にそぐわなかつた。なぜだらう、と考へて、彼はたつた今まで讀んでいた自分の昔の詩を思ひ浮べた。そうだ、おれはもうあんな夢を抱い